

美術館ニュース

群馬の森

no.189
2022 7/1

群馬県立近代美術館は7月2日(土)から再開します!

当館は昨年12月16日から休館し、空調設備更新工事や特定天井改修工事を行なってきましたが、6月中に全ての工事が完了し、7月2日(土)からおよそ半年ぶりに展示活動を再開します。

空調設備更新工事では、1974年の開館以来使用してきた灯油を燃料とした本館棟の熱源機器を、電気式の空冷ヒートポンプチラーに更新しました。また、各展示室の加湿方式も、燃料を使ったセントラル方式の蒸気ボイラーから、空調機ごとの電極式加湿器へと更新しました。その他、事務室やバックヤードのパッケージエアコンも、一部新しくなっています。

特定天井改修工事では、ホール、中央階段、2階ブラウジングの既存の天井を解体撤去し、耐震性の高い構造により新たに

天井材を設置しました。あわせて、雨漏りが生じていた一部屋上の防水層を更新しました。

その他に、災害等による停電の際に点灯し、観覧者・職員の安全を確保する非常用照明器具を、全館において更新しました。

見た目は改修前とほぼ変わらないですが、今回の改修工事を経て、美術館はより安全で快適な空間に生まれ変わっています。

7月2日から、まずは2階の展示室で収蔵作品によるコレクション展示(詳しくは3ページ参照)、そして7月9日からは、下記のとおり1階で企画展「うるわしき薔薇」が始まります。どうぞ気軽に改修後の群馬県立近代美術館にお立ち寄りください。

[リニューアルオープン記念特別企画]

7月2日(土) 「うるわしき薔薇」展ポスターまたは絵葉書プレゼント 【先着100名】

7月3日(日) 岡部昌幸特別館長による講演会「ピカソの『ゲルニカ』と現代世界」 午後2時~3時30分 【定員100名】

※要申込(申込方法は当館HPをご覧ください)

うるわしき薔薇 ルドゥーテ『バラ図譜』を中心に 2022年7月9日[土]~8月28日[日]

会場:展示室1

休館日:毎週月曜日(ただし7月18日、8月15日は開館)、7月19日(火)

開館時間:午前9時30分~午後5時(入館は午後4時30分まで)

観覧料:一般 800(640)円、大高生 400(320)円

* () 内は20名以上の団体割引料金

* 中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方とその介護者1名は無料

主催:群馬県立近代美術館

特別協力:コノサーズ・コレクション東京

本展は、ピエール=ジョゼフ・ルドゥーテ(1759-1840)がバラの原画を手がけ、多色刷点刻銅版により出版した、史上最も美しい植物図譜のひとつ『バラ図譜』(1817-24年)より選び出された122点を中心として、植物図譜をみる愉しみと、育て愛でる花としてのバラの魅力を紹介する展覧会です。さらに、日本のボタニカル・アートの先駆者、二口善雄による『ばら花譜』の原画や、日本を代表する写真家のひとり石内都が独自のまなざしでバラの生を捉えた《Naked Rose》を合わせて紹介し、時代を超えて人々を魅了する「花の女王」の人気の秘密に迫ります。

[関連事業]

* 講演会 ※2F講堂、要申込(定員100名)・参加無料
「ルドゥーテが描いたバラ(仮題)」 講師:御巫由紀氏(千葉県立中央博物館)
7月24日(日) 午後2時~3時30分

* 石内都アーティスト・トーク ※2F講堂、要申込(定員100名)・参加無料
8月20日(土) 午後2時~3時30分

* 学芸員による作品解説会 ※2F講堂、申込不要(定員100名)・要観覧料
7月16日(土)、8月3日(水)、8月14日(日) 午後2時~3時

※新型コロナウィルス感染防止対策を講じ、少人数で距離を保って開催いたします。
※最新の情報、申込方法等は当館HPをご覧ください。



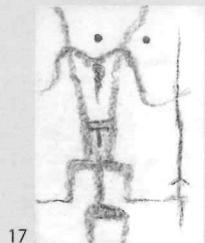
- 1.ピエール=ジョゼフ・ルドゥーテ
『ロサ・ケンティフォリア・フォリアケア』(部分) 1820年、
多色刷点刻銅版(手彩色補助)、コノサーズ・コレクション東京
- 2.二口善雄
『キモツコウバラ』1978年、
鉛筆、水彩、千葉県立中央博物館
- 3.石内都
『Naked Rose #3』2005年、
クロモジニック・プリント、株式会社 資生堂
© Ishuchi Miyako

令和3年度 新収蔵作品紹介

令和3年度は、21点の作品を厚意の寄贈により収蔵することができました。前田青邨による日本画をはじめ、野見山暁治の独自の抽象による油彩、1 近代日本を代表する水彩画家、中西利雄の水彩と素描、高田博厚による頭像彫刻、そして熊井恭子の現代テキスタイル作品まで、その内容は幅広いジャンルにわたっています。また、本県にゆかりのある作家では、湯浅一郎と川隅路之助の油彩風景、佐々木耕成の大画面の抽象絵画、鶴岡政男の素描が加わりました。

残念ながら、すぐに全てをお披露目することはできませんが、作品の準備が整い次第、機会に合わせてご紹介していく予定です。

分類	No.	作者	作品名	制作年	技法・材質	寸法(縦×横cm)	寄贈者等の表記
日本画	1	前田青邨	晩秋	1971	紙本着色	47.2×61.8	上原豊氏寄贈
油彩その他	2	湯浅一郎	早春の風景	1892-95	油彩・カンヴァス	39.7×54.8	湯浅清次氏遺贈
	3	川隅路之助	東京風景(習作)	1929	油彩・カンヴァス	50.0×60.6	川隅俊郎氏寄贈
	4	野見山暁治	どこから来たの	2012-18	油彩・カンヴァス	112.0×162.5	作者寄贈
	5	佐々木耕成	無題	2015	合成塗料・カンヴァス、パネル	183.5×276.5	佐々木創正氏寄贈
水彩素描	6	中西利雄	イタリア風景	1929	水彩・紙	50.0×64.7	中西利一郎氏寄贈
	7		風景	1929-31	水彩・紙	52.5×65.4	中西利一郎氏寄贈
	8		風景	1929-31	水彩・紙	56.7×76.5	中西利一郎氏寄贈
	9		風景	1929-31	水彩・紙	40.0×51.0	中西利一郎氏寄贈
	10		風景	1929-31	水彩・紙	50.7×65.2	中西利一郎氏寄贈
	11		少女	1929-31	水彩・紙	70.0×54.6	中西利一郎氏寄贈
	12		花	1932頃	水彩・紙	76.3×56.2	中西利一郎氏寄贈
	13		赤い服の女	1940頃	水彩・紙	76.0×56.7	中西利一郎氏寄贈
	14		椅子による女	1942頃	水彩・紙	64.5×50.3	中西利一郎氏寄贈
	15		風景	1936	鉛筆・紙	28.1×37.0	中西利一郎氏寄贈
	16		椅子に肘をつく女	不詳	鉛筆・紙	41.8×29.6	中西利一郎氏寄贈
	17	鶴岡政男	夜の騎士	1963頃	コンテ・紙	38.1×26.8	磯部真知子氏寄贈
	18		無題	不詳	墨・紙	19.0×13.5	磯部真知子氏寄贈
	19		無題(表裏)	不詳	墨・紙	19.0×13.5	磯部真知子氏寄贈
彫刻立体	20	高田博厚	美しきエミーII	1963	セメント、着色	28.0×34.5×18.0	高橋武氏遺贈
工芸	21	熊井恭子	Reborn(再生)	2021	ステンレススチールワイヤー サイズ可変(8点組)		作者寄贈



Museum: Shop

友の会だより

「うるわしき薔薇」展のグッズ販売が始まります！

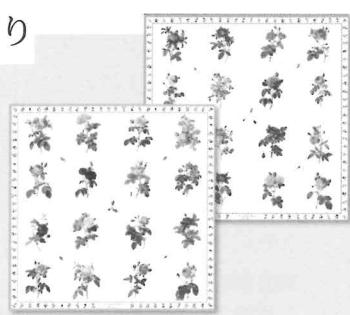
7月9日(土)～(一部は2日より)

バラは、暮らしを彩るのにふさわしい、装飾性の高い花。「うるわしき薔薇」展を観て、その感動を家に持ち帰りませんか？

今回は、ルドゥーテ『バラ図譜』のデザインを中心にグッズを揃えました。複製画の額絵は、お部屋をさらに華やかに上品にすることでしょう。また、コーヒーカップやスカーフなど小物にもルドゥーテのバラが咲き、見るたびにあなたをきっと笑顔にしてくれます。素敵なハンカチやクリアファイルは、お土産にもぴったりです。企画展関連書籍も用意しています。他ではあまり見ることができない、素敵なものばかりです。

展覧会鑑賞後は、ぜひミュージアムショップにお立ち寄りください。

お問い合わせ：群馬県立近代美術館 友の会 TEL 027-346-5560(代表)／FAX 027-346-4064



[展示室 2・6]

■日本と西洋の近代美術 I 7/2 ~ 8/28

『ゲルニカ』を原画としてピカソ自身の指示に基づきほぼ原寸大で織られた『ゲルニカ(タビスリ)』とその関連資料や、内容やモチーフの上で密接な関係がある2枚組版画《フランコの夢と嘘》を展示します。また、令和3年度新収蔵作品より、川隅路之助、野見山暁治、高田博厚、熊井恭子による4作品を初お披露目します。

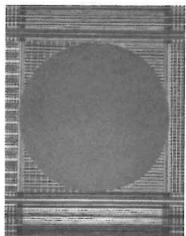


パブロ・ピカソ(原画) / ジャクリーヌ・ド・ラ・ボーム=デュルバック(織り)
『ゲルニカ(タビスリ)』
1983年(原画:1937年)

[展示室 5]

■生誕 110 年 特集オノサト・トシノブ 7/2 ~ 8/28

今年は、群馬県桐生市を拠点に円をモチーフとした抽象絵画を描き続け、国際的に高く評価されたオノサト・トシノブ(1912-1986)の生誕 110 年にあたります。当館が収蔵する油彩、水彩、版画作品により、初期から晩年までの制作の展開をたどります。



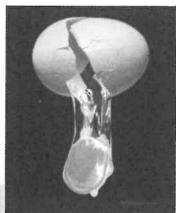
オノサト・トシノブ《One circle》 1958年

[展示室 3]

■現代の美術 I 7/2 ~ 8/28

多彩な表現による20世紀後半以降の美術を紹介します。

上田薰《なま玉子》 1975年

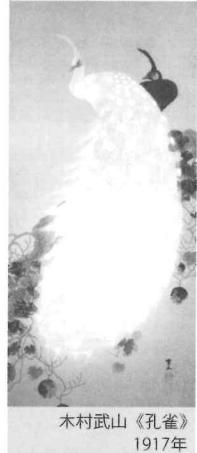


[展示室 7 (山種記念館)]

■花いろいろ 7/2 ~ 7/31

■院展ゆかりの画家たち 8/2 ~ 8/28

「花いろいろ」では近世から近代にかけて四季折々の花を表現した作品を、「院展ゆかりの画家たち」では日本美術院ゆかりの画家たちの多彩な作品と新収蔵作品である前田青邨《晩秋》をご紹介します。



木村武山《孔雀》 1917年

[展示室 4]

■ルドンの版画 7/2 ~ 7/31

■ムンクの版画 8/2 ~ 8/28

印象派と重なる時代、現実世界を超えた幻想や心の内面を描き出したルドンとムンクの版画作品を紹介します。ルドンは素描がそのまま版画に移せるリトグラフに可能性を見いだし、ムンクは木版の強い線と色面の大膽な対照を追求しています。版画は彼ら象徴主義の作家の重要な表現の手段となりました。



エドヴァルト・ムンク
《桟橋の少女たち》
1918-20年

M U S E U M | N E W S

こども+おとな+夏の美術館

2022年7月23日(土)~8月28日(日)

今年の「こども+おとな+夏の美術館」は、「うるわしき薔薇」展にあわせて、バラにかかわるプログラムがもりだくさん！ お申し込みが必要なプログラムがありますので、詳しくはちらし、ホームページをご覧になり、ぜひご参加ください。

ワークショップ

●ボタニカルアート・ワークショップ
一バラを描く

講師：成田順子(ボタニカルアーティスト)
日時：8月7日(日) 10:00~14:00



◆きれいなバラには水がある

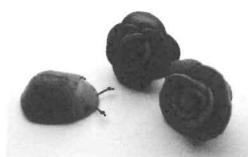
講師：近藤愛子(アーティスト)
日時：7月30日(土) 13:00~15:30



ミニワークショップ

▲バラとてんとう虫

開催日：7/27、
8/3、10、17、24
(毎週水曜日)
時 間：10:00~/14:00~



■ペーパーローズをつくろう

開催日：7/31、
8/14、21、28
(すべて日曜日)
時 間：10:00~/14:00~



△小さなバラ園

開催日：7/23、28、30
8/4、6、11、13、18、20、
25、27(毎週木・土曜日)
時間：10:00~/16:00

□《ゲルニカ(タビスリ)》
を見ながらお話ししよう

開催日：8/6、27(すべて土曜日)
時間：10:00~/14:00~



○もちかえり ルドゥーテのぬり絵

*会場では「新型コロナウイルス感染症に係る県主催イベント等実施ガイドライン」等に基づいた対策を実施します。状況により内容を変更または中止することがあります。

作品ひとつ

田中龍也

佐々木耕成は赤城山東面の山腹にある集落の外れに自らアトリエを建て、そこでひたすら大画面の抽象絵画を描き続けていました。その存在が「発見」され、2010年、3331 Arts Chiyoda(東京)で個展が開催されたとき、既に80歳を超える「新人画家」の登場は驚きをもって迎えられました。

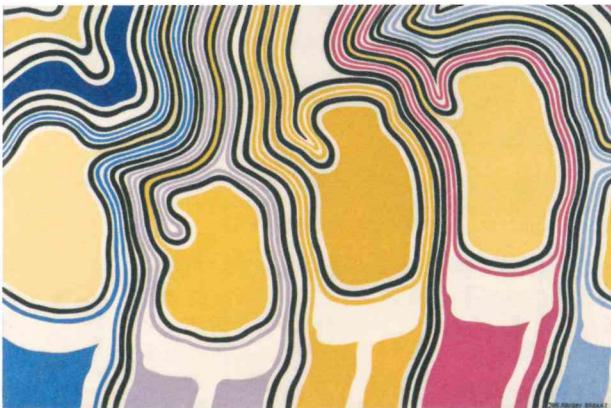
実は佐々木は1960年代、日本各地で前衛美術グループが活発に活動を展開していた中、東京を拠点とする「ジャックの会」の中心メンバーとして、身体行為による表現(現在はパフォーマンス、当時はハプニングと呼ばれ、ジャックの会は「ジャッキング」と名乗りました)など先鋭的な活動を展開していたアーティストでした。「群馬NOMOグループ」とも交流があり、66年前橋で開催された公開制作イベント「シャッターにえがく15人の画家たち」にはジャックの会メンバー数人で参加し、街中を練り歩きながらパフォーマンスも行っています。しかし前衛美術運動の行き詰まりをいち早く察知した佐々木は翌67年アメリカに渡り、以後美術活動を休止し消息不明となっていました。

熊本に生まれ20代で上京し、長くニューヨークで生活していた佐々木が父の介護のためにおよそ20年ぶりに帰国した後、なぜ群馬の山中に住むことになったのか詳細は不明ですが、佐々木は自らの足で生活場所を探し回り、林業の盛んな群馬県黒保根村(現桐生市黒保根町)で見つけた木こり小屋を借り、90年頃に移住しました。

佐々木は過疎の村で地域活性化や福祉事業に関わりながら、90年代半ば頃から絵画制作を再開しました。2000年代後半

の作品では赤青黄など原色に近い色が多く用され、直線で構成された鋭い角を持つ形態が画面を埋め尽くしていましたが、やがてこの作品に見られるように、波打つ曲線の中に有機的な形態が生まれては消えていく、生命の原初を思わせる表現へと緩やかに変化していきました。

佐々木晩年のこうした作品を複数並べて見ると、永遠に変転しながら無限に広がる世界に取り込まれるような感覚にとらわれます。それはおそらく佐々木の脳内で展開される思考のイメージであり、四角い枠で限定された画面には、宇宙そのものが捉えられているとも言えるでしょう。



佐々木 耕成(1928-2018) 《無題》 2015年
合成塗料・カンヴァス、パネル 183.5×276.5cm 佐々木創正氏寄贈
※令和3年度新収蔵作品

次回展覧会案内

理想の書物 - 英国19世紀挿絵本からプライベート・プレスの世界へ -

2022年9月17日[土]-11月13日[日]

会 場: 展示室1

休 館 日: 毎週月曜日(ただし9月19日、10月10日は開館)、
9月20日(火)、10月11日(火)。10月12日(水)は休室

観 覧 料: 一般 900(720)円、大高生 450(360)円

*()内は20名以上の団体割引料金

*中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方とその介護者1名、
群馬県民の日(10月28日)に観覧される方は無料

特別協力: 郡山市立美術館



クリスティーナ・ロセッティ著、ローレンス・ハウスマン画『ゴブリン・マーケット』1893年刊より
カバー(左)、表紙(右)
群馬県立館林美術館蔵

世界に先駆けて産業革命を成し遂げ、中産階級の台頭を見た18世紀末から19世紀にかけてのイギリスでは、読書の需要が高まり、大量の書物の出版が促されるなか、これに先立つ本作りの伝統をふまえた見事な挿絵を備えた豪華な書物が作られました。また、19世紀末には機械による書籍生産が氾濫することへの危機意識が生まれ、ウィリアム・モリスのケルムスコット・プレスを筆頭に、印刷の黎明期であるルネサンス期やさらに中世の写本にまで遡って研究し、あらためて理想的な美しい本を作ろうとする運動がおこります。この用紙、活字、デザイン、装丁を吟味して仕上げるプライベート・プレスは、美術的に価値の高い、また機能的で読みやすい出版物を生み、本作りにおけるひとつの理想型を作り上げました。本展では、美しい本作りの土壤として19世紀イギリスの挿絵本を中心に紹介する第1部と、プライベート・プレスの出版物に焦点を当てる第2部により、理想の書物を求めた運動を跡づけることを試みます。

